

昨今のモンゴル事情について

特定非営利活動法人 リ・アース 原 田 幸 希

1. はじめに

モンゴルの昨今の状況は、まさにビル建設ラッシュの様相を呈しています。町中でビル建設が昼夜行われ、真新しいビルやホテルあるいはマンションが建設されています。中央広場にもモンゴルのシンボルである、大きなチンギス・ハーンの像が完成しました。日本大使館付近には、大きな外国資本のホテルも順次建設中であり、また、日本資本の JAPAN TOWN と外国資本のマーシャルタウンも建設中です。昨年、初期分譲した JAPAN TOWN の分譲マンションは売り出しと同時に完売したということです。

それに伴い、市内の地価も上昇し、ウランバートル市内は土地不足になっています。

昨年の8月にもウランバートルを訪れ、たくさんのモンゴルサイドの協力者と日本とモンゴルのこれからのパートナーシップに関して、意見交換を致しました。とにかく、旧体制から現在の形に移行してまだ、10数年であるモンゴルは、あらゆる分野において、物資が自国にて生産できる状況には、まだまだほど遠く、生活必需品や食料をはじめ、ほとんどの物資を輸入に頼っている状況です。また、前段で紹介したビル等の建設技術者もモンゴル国内にはほとんどおらず、中国からの現場技術者の流入によって対応している現状があります。

昨年10月には大阪にて、モンゴルと日本の首脳間において第二次段階の日本とモンゴルのさらなる交流が約束されたところです。その中で主要なテーマは、やはりモンゴル自国におけるあらゆる物資の生産体制の確立、技術者の育成、社会資本の整備、また、それらのハードとソフトの両方に関する日本側の協力です。また、モンゴルサイドはモンゴル国内における日本による地下

資源の利活用について言及しました。第一次産業的技術の移入に関しては、幾人かのモンゴル政府関係者や業界関係者等とも協議しましたが、気候風土が類似している北海道との交流を望むとの意見が多数あげられました。日本側においても、北海道において、モンゴルに関する研究や交流をされている方はかなりいらっしゃるようです。そういう前提の中での交流をする形が確立していけば、日本とモンゴルの関係を深めるという意義において、日本とモンゴル国両方にとってメリットがあると考えています。

ただ、皆様もお気づきだとは思いますが、モンゴルに日本から飛行機に乗り、空港に降りたって、まず、どう感じられましたでしょうか。空港から町までの道路は、舗装には数多く穴が開いており、車も避けながら通行しなければなりません。石炭を使用した火力発電所の煤煙が低くたなびき、町には整備不良の車が排気ガスをまき散らし、渋滞しています。町周辺の丘には家畜を失い、仕事を求めて地方から集まってきた遊牧民が端材や石炭など燃やし、生活しています。夏であれば多少の風が抜け、汚染された大気も吹き飛ばされますが、風の吹かない冬には、ちょうど盆地のようになったウランバートルには低く、煤煙が立ちこめスモッグを発生させています。

町中を走る道路地下部には旧ソビエト時代に建設された火力発電所から配管された暖房のための熱湯を流す管が埋設されており、その管も老朽化しており、いつ陥没するかわからない状況にあります。

急に都市化したために下水道の問題があります。飲料水を含め、水の汚染がかなり進行しています。ゴミの問題もあります。日本のように分別などせず、ゴミの山にそのまま投棄しています。

2. モンゴルとの出会い

私が、所属する特定非営利活動法人リ・アースは、まさに、前段で紹介した火力発電所から配管された暖房のための熱湯を流す管の管理のために設けられたマンホールの中で生活する子供達との出会いから始まりました。マンホール・チルドレン達です。その当時、モンゴル・ウランバートルに飛び、ビデオ『蒼い空』『黒いサンタ』を製作しました。あらゆる不当な格差や差別をなくし、未来に生きる子供達に平和な世界を手渡すために2001年8月23日に設立されました。活動の方法は、音楽、映像などあらゆるメディアを使って最貧困の子供達のあらゆる差別の実情を訴え、支援を呼びかける活動を行っています。ボランティア・スタッフの一人一人がプロデューサーになって、講演やイベントの企画を進めています。

2003年10月には、マンホール・チルドレンの職業訓練センター『ミルクの雨』を設立しました。現在8歳から16歳までの25人の最貧困の子供達がここに通っています。最貧困とは・・・毎日食事を摂ることができなかつたり、親のいない環境にある子供達のことを指します。

子供達は、ここでフェルト・皮工芸やモンゴルの民族音楽・ホーミーを学んでいます。職を身につけることで、将来自立への手助けをするためと、収入を得るためには、つらい仕事しかしてこなかった子供達がここにおいて働くことの喜び、楽しさを理解して欲しかったからです。ミルクの雨命名の理由は、ミルクは子供の成長には欠かせないもの、また、雨は誰にも平等に降り注ぐ天から恵みという意味で名付けました。現在、モンゴル現地で設立したNGO NCCRと連携しながら施設を運営管理しています。

リ・アースでは、この子供達の学費・給食費・交通費などを支援する里親と、毎年行われる新年パーティー・サマーキャンプなどの資金カンパを募っております。また、ミルクの雨では、里親募集の小冊子を配布しております。関心のある方は、

メールに、ご住所・お名前・電話番号を明記の上、ご送信ください。折り返しご連絡、小冊子をお届けします。詳細活動に関しましては、URL <http://www.re-earth.com/>をぜひご覧ください。モンゴルに携わる方々のご協力の形をあわせてお願い致します。

3. モンゴルが日本にもとめること

モンゴルといえば、青い空、広大な平原・羊・馬・らくだ・・・星空・心やさしい素朴な人たち、どこか日本の故郷のような感があります。モンゴルにはモンゴルの生活するスピードがあります。のんびりとしたスピードがあります。

モンゴルの生活は、今でも基本的には遊牧民です。自給自足の生活をしています。しかし、ここ数年、特に、都市部では加率的に生活が利便性が要求されてきています。そこに遊牧をやめ、都市に地方から人がかなり流入してきています。貧富の差も拡大しています。まずは、子供達の教育です。国を支える礎は子供達です。きちんとした教育を受けさせなければなりません。次には、仕事です。しかし、実際は仕事がありません。仕組みがありません。基本ができていないのです。私たち日本はモンゴルに対し、日本のいままで作り上げてきた優秀な仕組みを建設していく手助けをしなくてはなりません。

モンゴルサイドは、まず一人でも多くの日本の方にモンゴルを知っていただきたいと言っています。そして、来ていただきたいと。そして、わかっていた上で、協力していただきたいと言っています。モンゴル国内において、様々な形で高尚な研究をなさっている先生方の研究は、これからのモンゴル国の発展のため、また、地球レベルで問題になっている地球温暖化の解決までのプロローグ、持続可能な社会の構築の礎になると考えています。また、そこには人々の生活があり、人が暮らしています。どのような受け入れ方をさせていくのかも考えなくてはなりません。私はそこを、これからプロデュースさせていただけたらと考えています。どうしたら皆様の研究が実

際の仕組みとして、モンゴル国内において形になるのかを、プロデュースさせていただきたいと考えています。すべての形の基本は人の心と心のつながりだと考えます。そうして得られるものが信頼だと考えます。私の役目としましては、その信頼を作る手助けをさせて頂けたらと考えています。トータル的サポートしていきたいと思います。

謝 辞

最後に今回、このようなすばらしい場において発言させていただく機会を頂きましたことに関しまして、関係者の皆様に心から謝辞を申し上げます。これからは、逆にお願いばかりではなく、気軽にどのような案件であっても相談して頂ければ誠心誠意対応させていただきます。ありがとうございました。最後に何点かモンゴルの写真を紹介させていただきます。ご静聴ありがとうございました。

写 真

